



| | |
|------------------------|---|
| Title | Effects of changes in sensory receptor sensitivity around the anterior teeth on motor learning [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review] |
| Author(s) | 蒔田, 玲果 |
| Citation | 北海道大学. 博士(歯学) 甲第13867号 |
| Issue Date | 2020-03-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/78603 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Reika_Makita_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（歯学） 氏名 蒔田 玲果

学位論文題名

Effects of changes in sensory receptor sensitivity around
the anterior teeth on motor learning

(前歯部における感覚受容器感度の変化が運動学習に及ぼす影響)

キーワード

前歯部周囲感覚受容, 課題遂行能力, 運動学習, 麻酔, ひまわりの種

口腔内での食物の位置決め, 保持, 分割, 粉碎という一連の食物摂取時の咀嚼運動においては, 歯周組織内感覚受容器からの求心性シグナルが重要な役割を果たしている. 歯科インプラントや可撤性義歯使用下では歯根膜感覚受容器からの求心性シグナルが得られないため, 食物摂取時の課題遂行能力が低下するとされている. 一方, 健全歯列を有する人では, 特定の咀嚼運動を繰り返し訓練すると食物摂取時の課題遂行能力が向上する運動学習(motor learning)の獲得が報告されている. しかし, 歯周組織感覚受容器の感受性が低下した状態で運動学習の獲得が可能かについては明らかにされていない.

本研究の目的は, 前歯部周囲の歯周組織内感覚受容器の感受性を麻酔薬によって低下させた場合に, ひまわりの種の摂食における課題遂行能力に影響があるか, さらに運動学習が獲得できるかを検証することである.

被験者は54人(27±5.8歳)で, ランダムに对照群(C群: N=18), 口腔粘膜表面麻酔群(T群: N=18)および前歯部浸潤麻酔群(I群: N=18)に分けた. 全被験者は, ひまわりの種の内容物を破損しないまま前歯で殻のみを剪断し, 舌と口唇を使って殻内部の種子を殻から分離するというタスクを3粒行って, これをベースラインとした. その後, T群は口唇及び口腔内全体への5% lidocaine (Xylocaine Ointment 5%)の塗布を行った. I群は上下左右の中切歯根尖相当部へ30mg/ml prilocaine hydrochloride (Citanest Dental Octapressin®) 3.6 mlを浸潤麻酔した. 麻酔奏効状態は, 試験官が金属製の練成充填器で対象部位に触れ, 感覚を感じるかの質問によって確認した. 3群とも上記タスク10粒を行うことを1セットとし, Set 1からSet 6まで6セットを行った. T群はSet 3終了後にbaseline後と同様の表面麻酔を行った. タスクの成績は5点評価システムによって点数化し, さらにタスク中の3次元下顎運動記録からタスク所要時間を計測した. タスクの成績と所要時間はベースライン時の結果を基準値とし, 相対変化で算出した. 統計解析は二元配置分散分析およびFisher's Least Significant Difference testを行った.

タスクの成績は, T群とI群がSet 1においてC群より有意($p < 0.031$)に低下した. またタスク所要時間は, Set 1でT群とI群がC群より有意($p < 0.042$)な増加を示し

た。この結果から、表面麻酔と浸潤麻酔による歯周組織内感覚受容器の変化は、課題遂行能力に悪影響を及ぼすことが示唆された。さらに Set 1 と Set 6 でタスク成績を比較すると、T 群と I 群では Set 6 が Set 1 より有意 ($p < 0.001$) に高い値であり、タスク所要時間は 3 群とも Set 6 が有意 ($p < 0.004$) に短かった。このことから歯周組織内感覚受容器の感受性が低下した状態でも、運動学習の獲得が期待できることが示唆された。